



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S
N E W S

VOL.40



エッセイ
宗達讚

収蔵品紹介

琳派・若冲と雅の世界

印象派の巨匠 ピサロ展

企画展「あら、尖端的ね。」
関連イベント報告

「やさしいミュージアム講座」
受講者募集

伊藤若冲 《雪中雄鶏図》(部分)
江戸中期 細見美術館蔵

II
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

宗達讚

館長 芳賀 徹

俵屋宗達はまさに行くとして可ならざるはなし、といった万能の技量と、力強い構想力と、幽艶とも優雅ともいべき画趣とをあわせもつ偉大な絵師であった。『舞楽図展風』や『風神雷神図屏風』などの躍動と緊張をはらんだ大作から、『白象』や『唐獅子』などのなんと大胆不敵な杉戸絵をへて、『平家納経』の贅を尽くしてなお深沈たる趣の装飾、また本阿彌光悦の書と合作の優美きわまる『鶴下絵和歌巻』にいたるまで、みな生命力に満ちた完璧な作品ばかりだ。

「創造する伝統」〈Tradition créatrice〉とは、私が友人とはからって某文化財団のために編みだした標語だったが、まさにその語を体現しているような画人が宗達である。大和絵のゆたかな伝統も、唐絵の画法も、たつぷりとしかも鋭く学びとって、桃山＝江戸初期ならではの断然新しい豊麗な画風を生みだした。宗達のすぐ前の先達には『檜図屏風』や『洛中洛外図屏風』の狩野永徳がおり、『竹林図屏風』や『桜楓図襖』の長谷川等伯がおり、宗達の同行者としては本阿彌光悦がいたことを思いあわせれば、さらにもあの16・17世紀の交の藝術的天才たちの創造力の旺盛さ、雄渾さに感嘆せずにはいられない。たしかに、室町末から桃山・江戸初期にいたるあの時代、日本列島は政治的覇権の場であると同時にゆたかな文化ルネサンスの舞台でもあったのである。

京都がまさに藝術の都であったその時代に、宗達は扇屋または絵屋をいとなんで、都の上層町衆の嗜好にこたえ、またそれを誘導して行って、みずからも上層町衆の一員となっていた。大変な人気を呼んでいたであろうに、この天才絵師の生没年も墓所もいまなお不明というのは、かえって日本風に奥ゆかしいのかもしれない。

宗達は金地濃彩の大作ばかりでなく、小幅の水墨画もすばらしかった。国宝の『蓮池水禽図』や重文の『牛図』双幅は、水面の大气のしめりやそこににじむ朝の光をみごとにとらえ、あ

るいは宗達独創の「たらしこみ」の画法で牛の筋骨の重みとその存在のふてぶてしさまで表現しつくして、見る者を驚かす。日本人憧憬の牧谿の水墨の画境にもっとも鋭く接近して、それを日本化したのが、これらの宗達墨絵であろうか。

そのなかでも、展覧会で見かけるたびにうれしくなり、なんとなくほほえまずにはいられないのが、黒い仔犬を一匹

描いた小幅（縦90.3×横45.0cm）の『狗子図』である。おや、宗達はこんな愛らしい絵まで描いたのか、とその画風の幅の広さと彼の精神の度量のゆたかさに打たれずにはいない。

ころころと肥えた仔犬一匹の絵である。丸い胴体に対して頭が大きすぎるようにも思うが、生まれて二、三ヶ月というころには、人でも犬でも頭でかちなのだろう。その重たそうな頭を垂らして、犬ころはしきりに地面の匂いを嗅いでいる。あるいは、春になって動めきだした虫けらでも見つけて、大きな目玉で追いかけているのか。そのしぐさと、白く塗り残されたびっくりしたような眼が、いかにもかわいらしい。春になって、はじめて野外に出てきた仔犬のよろこびを、その全身であらわしている。短いしっぽがぐるっと丸くなって、上に跳ねあげられているのさえ、新しい世界への仔犬の好奇心のあらわれと思えてくる。

その背中や頭やしっぽの毛は濃いめの墨でたつぷりと塗られているが、それらが口もとや腹や足もとの和毛の部分に移ると、宗達得意の「たらしこみ」でにじみをつくりながら淡い白っぽいふくらみに移行する。仔犬の喉もとと腹のぼてぼてとしたふくよかさ、その量感と毛の感触までが伝わってくるようだ。絵師宗達はよほどよく犬を知り、可愛がっていたにちがいない。

仔犬の耳や右前脚から肩への輪郭の線や尻のあたりなど、からだに重なる部位は、「彫り塗り」という白い塗り残しの線で描かれている。これは『牛図』の彫り塗りにくらべると、たしかに少々きつすぎる感じがしないでもない。しかし、それだけ仔犬の体内の生命の充実をくっきりと表現しているともいえるだろう。

そしてこの縦長の画面で、黒い丸っこいぼてりとした仔犬の重みを、いかにもやわらかくやさしく支えているのが、画面下部に七、八本薄墨で描き添えられた春の草々である。これらが描きそえられて、仔犬は春をよろこぶ無心のいのちの表現となり、陽炎ただよう春の野に遊ぶ小動物となった。淡く浮かぶ春の草々は、少しほどけかけたわらびやぜんまいか。たんぽぽもあるし、葎も花を開いているようだ。なんというやさしさであろう。万葉の志貴皇子の歌「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも」以来の、この列島に生きる人々の、春にめぐりあうよろこびが、ここではこの幼い黒犬のからだとしぐさに託されて、画面いっぱい溢れることとなったのである。宗達自身もちろんこの古代以来のやまと歌と「もののあはれ」の感情の歴史を熟知し、それをわが身に体していたのだろう。

数年前、東京国立近代美術館のRimpa展で、薄墨の葉をひろげてひよろひよろと立つ枝豆一、二本の宗達小幅をはじめて見たことがあった。そのときも、私はたらしこみの葉のむこうに淡い月かげがさしているように感じて、その「もののあはれ」の表現のみごとさに深く心打たれた。そして仔犬と春草の取り合わせと同様に、このようななにごともない枝豆の数本を画題に選ぶ画家の心の自由さに驚嘆するとともに、これらをまさに神品ともいべき縹渺たる生命の表現と化してしまうその力量のゆたかさに、ただ讚嘆の声をあげる以外になかったのである。



俵屋宗達 《狗子図》(部分) 個人蔵

収蔵品紹介

明治4年11月、額田県が設置され、旧岡崎城内二の丸に県庁が設けられますが、本図はこの額田県庁の間取図です。裏面に「三河国岡崎城内県庁図」とあります。様式は江戸時代の間取りの描写様式に沿うもので、板敷間を茶色、畳間を黄色で塗りわけ、畳の間には畳数が書き込まれています。江戸時代、岡崎城二の丸は藩主の居所であり、さらには藩政を担う役人が詰める藩庁が置かれていた場所です。まさに、二の丸は岡崎城の中核となる場所で、岡崎藩による領域支配の要となる施設が置かれていたわけです。明治になって設置される額田県庁はこの江戸時代の藩庁を利用したものとみられます。現在、江戸時代の二の丸御殿の図面は、旧岡崎市史第2巻掲載の本多家所蔵の「岡崎城二の丸城主住宅間取」、岡崎藩士和田家に伝来した「参州岡崎二の丸御住居図」の2点が知られているだけですが、これらと本図を比較すると、共通する部分とそうでない部分に分かれます。相違する箇所は、たぶん、修理などの普請を実施したことによるものでしょう。二の丸御殿の修理のことは『中根家文書』上巻にも見られます。和田家文書「参州岡崎二の丸御住居図」と比較すると、「県庁二相用ユ」とあるように県庁として用いら

れた部屋は、江戸時代には「御広間」・「二之間」・「土圭之間」・「大料理之間」などであった場所です。本図からは間取りに伴う柱、門、井戸の位置を知ることができ、二の丸御殿遺構の発掘調査などにも参考となるでしょう。（学芸員 堀江登志実）



三河国岡崎城内県庁図 大きさ 132cm × 109cm

村瀬恭子は、2006年に当館で開催した「森」としての絵画：絵の中で考える」の出品作家で、なかなか作品購入の機会がないなか、この度2008年のギャラリーの個展にあわせて制作された2作品を収蔵することができました。

《Sherbet》は、近年の作品とは異なり、立ち並ぶ木々と、横に広がる枝と水溜まりとから成る垂直×水平の明快な構図を大きな特徴としています。ただし、堅固なはずのこの絵画空間は、風を視覚化したような流れるストロークによってあえなく崩壊し、ゆらゆらと揺らめき続けています。画面中央に描かれた枝を張った弓なりの樹木は、奥に佇む少女の姿に呼応し、あたかも生命を宿し、背後から少女に覆いかぶさろうとしているかのようです。それに加え、複雑に重なり合う枝々と風の帯は、曖昧な前後関係を有しており、こうした不安を掻き立てるいくつかの要素は、少女の心情を表象しているかのようにも感じられます。

一方、エメラルドの光輝く洞窟から少女が駆け出してくる《Cave of Emerald (exit)》は、《Sherbet》以上に大胆なストロークを特徴としています。近年、村瀬は、森や木立といった、それ自体が本来的に複雑な空間であるような場を絵画空間のなかに移し、巧みに展開してきましたが、洞窟という大きな空洞を中心に置いた本作は、対象自体

の空間のあり方が異なるという点でも注目されます。また、作家自身が、本作の制作を機に、「重さ」や「固さ」のあるものを如何に表現するかという課題ができたと言っており、新たな展開を示す作品として捉えることもできるでしょう。

絵画という平面のなかに、新しい空間を創造しようとする村瀬の仕事は、「絵画」の本質についての、大きな問いかけの作業だと言えます。しかし、そうした大きな問いの一方で、不確かな少女の姿を描いたその作品は、非常に私的で親密な物語性をも有しており、私たちに惹きつける大きな魅力となっています。

（学芸員 千葉真智子）



村瀬恭子《Sherbet》2008年



村瀬恭子《Cave of Emerald (exit)》2008年

京都 細見美術館 琳派・若冲と雅の世界

学芸員 杉山 明美

細見美術館

細見美術館は京都市美術館などがある岡崎公園の西側にあります。地上3階地下2階の櫛目引きの外壁を特徴とする瀟洒なたてものは、大江匡(おおえただす)氏の設計で、京都の町家のイメージをとりいれているとか。展示スペースは1F、B1、B2があてられており、各階ともコンパクトな広さで無駄なく一巡できるよう来館者にとってやさしい動線がしかれています。京の町並みが眺望できる茶室や吹き抜けとなっている中庭には、カフェやミュージアムショップもあり、開放的でこちよい空間が作られています。



コレクションの生みの親

かつて美術品は「寺宝」や「大名道具」ということばがしめすように、寺院をはじめ大名家や公家の人々のものでした。ご承知のとおり日本は明治維新による体制崩壊、廃仏毀釈、文明開化、欧化政策というかつてない大変革のなかで、膨大な数の仏教美術や古美術品が市場に放出されました。想像を絶する大量の美術品が海外へ流出していく一方、国内では殖産興業政策によって巨万の富を得た三菱、三井、住友、大倉、藤田などの財閥関係者や、炭鉱、鉄道、繊維、映画、酒造事業などから身を起こした新興実業家が寺院からの流出や大名家の売立を通じて美術品の収集を始めていました。有名な益田鈍翁や原三溪はその最たる人々であり、彼らに続くコレクターには、戦前から戦後にかけて秘蔵の蒐集品を一般公開に踏み切った東急電鉄の五島慶太(五島美術館)、荏原製作所の島山一清(島山記念館)出光興産の出光佐三(出光美術館)ら、宗教界では天理教二代真柱・中山正善(天理図書館)、世界救世教教主・岡田茂吉(MOA美術館)らがあげられます。

今回の展覧会で拝借する細見コレクションの生みの親である細見家の初代古香庵(1901～79)も上記のコレクターに連なる一人です。古香庵は明治生まれの立志伝中の人。毛織物業で財を成した古香庵が古美術の世界に入ったのは、昭和のはじめ。奈良の古寺を回って鑑識眼を高め、事業で得た資金をもとに古美術収集に乗り出しました。1960年代に入ると古香庵は寺社や国公立博物館にならび、一人で他を圧倒し大量の指定文化財を所有する関西の大コレクターとしてあり、古美術の研究者として茶人としてもその名は国内外に広く知られる存在になっています。その蒐集品の中心をなすのは平安・鎌倉期の

仏教美術、室町期のお茶の湯画、伊藤若冲の作品です。その古香庵の蒐集熱は二代古香庵(1922～2007)へと引き継がれます。二代古香庵が興味をもった分野が琳派。そのなかでも江戸後期の酒井抱一の瀟洒な味わいに深く傾斜し、鈴木其一、神坂雪佳らも対象となっています。

初代の蒐集した平安・鎌倉時代が中心となる宗教美術、二代の蒐集品である江戸絵画などの作品をもとに細見美術財団が法人化されたのは平成8年。その2年後の平成10年にはコレクション約千点、内の約三十点は重要文化財という質量ともに申し分のない高さで細見美術館はオープンしています。

今回の展覧会は「琳派・若冲と雅の世界」と銘打っていることから、この初めに掲げている琳派と若冲の作品が本展の目玉と思われる方もきっと多いはず。細見美術館といえば、琳派と若冲の美術館といわれるほどに、この二つのユニットは今や押しも押されぬ美術館の顔。もちろん会場でも、明るくきれいで品のよい掛幅や屏風などで琳派を大きく取り上げます。またあの鶏のジャクチューも岡崎初のお目見えとなります。しかし、会場では是非とも「雅の世界」のコーナーまで鑑賞力を残しておいてほしいと思います。実はこの「雅の世界」の出陳品こそが知る人ぞ知る細見コレクションの核、関西の大コレクター、細見家の本領を発揮する第一級の文化財だからです。初代の細見古香庵が古美術の世界に足を踏み入れた分野がまさにここ。会場では、かつては信仰の対象となっていたはずの仏像や仏画や鏡像をはじめ、そしてさる姫君が愛蔵していたと思われる絵巻や調度。天下人の住まいを飾ったと伝えられる工芸品も出陳されます。古美術に生涯を捧げた古香庵の真骨頂をたっぷりとお楽しみください。



重要文化財 《金銅透彫尾長鳥唐草文華鬘》
鎌倉前期 細見美術館蔵



鈴木其一 《紫陽》 江戸後期

何かしら良き神のごとき存在

学芸員 村松 和明

印象派の中心的な画家といえば、よく知られるモネやルノワールを思い浮かべる方が多いことだろう。しかし、実際に印象派の中心的存在にあったのは、カミーユ・ピサロ(1830-1903)であった。全8回に及ぶ「印象派展」のすべてに参加したのが唯一ピサロだけであったことから、その位置付けがわかる。印象派の画家たちと打ち解けることのなかったポール・セザンヌさえも、ピサロにだけは心を開き「何かしら良き神のごとき存在」と讃え、またあるときは「最強の画家」と賞嘆し、彼を高く評価していた。

ピサロの肖像写真や自画像(fig.1)に見られる、長い髭をたくわえたその容姿は、なるほど確かに神のごとき風貌であったことが想像できる。実際には、その外見だけではなく、内面的にも温厚で面倒見がよく、印象派のグループの指導者として、多くの画家から父のように慕われていた。つまり「良き神のごとき」指導者としての資質と包容力を、かねそなえていたということになる。

セザンヌが形容した、もうひとつの「最強の画家」というはどうだろう。ピサロのあの豊かな田園風景の、自然への賛歌が高らかに謳いあげられたような穏やかな画風からは、「最強」という言葉は少々そぐわないように感じられるのではないか。しかし観察力の優れていたセザンヌは、ピサロの作品には、穏やかで甘美な世界ばかりが描かれているわけではないことを知っていた。ピサロの風景表現の取り組み方には、常に伝統を取り入れながらも、芸術表現を次世代へとつなげようとする強い革新への意思があった。彼は様々な画家の影響を受け、新たな手法を取り入れながら、そのスタイルを変容させていったのも、



fig.1 カミーユ・ピサロ《カミーユ・ピサロ、自画像》1890年

芸術表現のあくなき探求の結果であった。それが印象派の前衛たらしとする精神の根幹を支えていたといっても過言ではない。

このような彼の革新の意思は、その出自にも関係しているように思われる。彼はモネやルノワールのようにフランス生まれでもなくフランス人でもない。カリブ海に浮かぶセント・トーマス島に貿易商を営むユダヤ人家庭の三男として生まれた。彼の家は、ユダヤ教ではあっても、異端審問を逃れるためにそれを隠してキリスト教を装うマラーノと呼ばれる家柄であった。

1852年、22歳のピサロは、家と、継ぐはずであった貿易商の仕事を手を捨てて、「描く自由」を求めてパリに向けて船出をした。当時の社会体制のなかで、さまざまな枠を超えようとした強い意志、革新の精神が、それ以降の彼の芸術表現のなかには確かにあった。

ピサロが家出同様に、パリに出てから30数年後の1888年、彼がポール・シニャックに宛てた手紙のなかにある「自由な人種の芸術家として感じる能力は保持しなければならない」という言葉は、ピサロが、屈することのない強い精神で「描く自由」を持ち続けてきたことを伝えている。

この展覧会では、ピサロの作品はもとより、彼が影響を受けた画家や仲間、家族の作品を展示し「最強の画家、ピサロ」の人物像を浮かび上がらせようとする試みである。



fig.2 カミーユ・ピサロ《窓からの眺め、エラニー＝シュル＝エプト》1888年

企画展「あら、尖端的ね。」関連イベント報告

学芸員 千葉 真智子

昨年度末の企画展「あら、尖端的ね。一大正末・昭和初期の都市文化と商業美術」では、いくつかの関連イベントを開催しました。こうしたイベントは、もちろんその場限りの出来事であり、体験した人もごくわずかしきません。そこで、ここに記録に残し、ご紹介したいと思います。

岡崎市に図書館交流プラザ（りぶら）が開館したことは、皆さんご存知のことと思いますが、本企画展覧会では、出張企画として、このりぶらのホールを会場にシンポジウム「大正・昭和の都市とモダン・ライフ」を開催しました。結果から言えば、思うようにお客さんが集まらなかったということになるのですが、シンポジウム自体は、興味深い内容だったのではないかと考えています。

当日は、東洋大学教授でシリーズ『コレクション・モダン都市文化』（ゆまに書房）の監修者であり、『テキストのモダン都市』等の著書のある本展覧会テーマにはぴったりの和田博文氏を迎え、芳賀徹当館館長と岡崎むかし館の研究員野本欽也氏、私の四人が加わりディスカッションを行いました。和田先生の明晰なお話はもちろん、野本氏が紹介した昭和初期の岡崎モダンを象徴する「喫茶みどり」のメニュー（ソーダ水にコロケ、オムレツ…。そして不思議なことに‘アスパラガス’も）や岡崎の「文化住宅」の先駆けと言える松井邸（中廊下を軸にし、子供部屋も備えている）の話には、聴講の方々も、また和田先生も大いに関心を持たれたようでした。今回の展覧会では、松坂屋の資料を多数展示したのですが、興味深いことに松井邸が、この松坂屋の家具をセット注文していたことも明らかになりました。

通常の美術博物館での講演会も3本を用意し、また4本の映画上映も行いました。

神野由紀先生には「百貨店の子ども文化—商品化する子ども世界」と題して、百貨店が如何に「子ども文化」を積極的に生み出したかをご紹介いただきました。七五三のお祝い事や入学祝いの文具の贈物など、現在私たちが当然のように受け入れている習慣は、百貨店によってプロデュースされたことが示され、また三重県にある土井家（有力な林業家）の蔵を改装した土井子供くらし館に三越の商品が数多く残されていることについて、昔は、船で材木を東京まで運び、空になった船に東京の最新の商品載せて帰っていたとの説明があり、現在では考えられない「もの」の移動のあり方も垣間見える非常に面白いお話でした。

馬場伸彦先生には「モダン都市のモダンライフ」と称して、新しい都市文化の諸相を

お話いただきました。馬場先生がお持ちのコレクションの数々にも驚かされ、当時のエロ・グロ・ナンセンスを象徴する出版文化の隆盛ぶりが実例を通して実感できるものとなりました。

田島盛都子氏には、「商業美術の祖としてのウィンドー・ディスプレイ」と題するお話をいただきました。膨大なレジュメをご用意いただき、商業美術におけるマネキンの重要性とその歴史についてお話いただくと共に、特別に愛知県の商業美術の状況についてもご紹介いただきました。愛知商業美術協会の活動を始め、愛知県では意外なほど多くの商業美術展が行われており、また名古屋市立商業学校教師増田金蔵が日本で最初に「商業美術」の語を使用したことなどが明らかになり、愛知県の人々には大いに興味深いものだったと思われます。

映画は4本を上映し、ハリウッド映画の影響を大いに受けていた時代の小津安二郎作品『非常線の女』『淑女は何を忘れたか』のほか、モダン映画では小津以上に人気のあった島津保次郎の『隣の八重ちゃん』、そして、日本で最初にトーキー映画を監督した五所平之助の『花籠の歌』というラインナップで、いずれも都市に生きる「モダン女性」の尖端ぶりと、陰の部分を生き生きと、また悲哀を込めて表現した秀作でした。銀座を舞台にした『花籠の歌』では、背景にクラブ化粧品や明治チョコレートのネオンサインが光輝いており、当時の都市の風景も垣間見ていただけたことと思います。

残念ながら、講演会も映画も参加者はあまり多くはありませんでした。展覧会の表面的な楽しさから一歩踏み込んで、当時の風俗美術についてもっと知りたいという気持ちになっていただけないものかと、もどかしさも感じましたが、参加いただいた方には、刺激のある内容ではなかったかと（希望をこめて）思っています。



シンポジウム会場風景

「やさしいミュージアム講座」受講者募集

申し込み
受付中!

市民の方々に歴史や美術をより身近に感じていただけるよう、毎月1度の連続講座「やさしいミュージアム講座（前期）」を今年度も開催します。当館学芸員が各テーマに沿ってわかりやすくお話しします。

みんなで歩こう！新編岡崎市史（史跡・遺跡編）

*日時／ 6月～10月の毎月第2水曜日
9:30～12:00（150分）

※ただし、6、7、9月の第2水曜日は開催日を変更します。

*内容／ 岡崎宿二十七曲、丸山地区の遺跡など岡崎市内の史跡・遺跡を巡りながら、当館学芸員がわかりやすく解説します。（雨天決行・現地へはバス移動）

【第1回】 6月 9日（火）「岡崎宿二十七曲りを歩く」

【第2回】 7月 7日（火）「藤川宿を歩く」

【第3回】 8月12日（水）「丸山地区の遺跡を歩く」

【第4回】 9月 2日（水）「真宮遺跡と北野廃寺を歩く」

【第5回】 10月14日（水）「滝山寺縁起を歩く」

*定員／ 35名

*参加費／ 無料



「日本美術」は、いつからあるの？

*日時／ 6月～10月の毎月第3水曜日
10:30～12:00（90分）

※ただし、7、9月の第3水曜日は当館が臨時休館中のため開催日を変更します。

*内容／ 共通のテキストを用い、近代日本において、どのように「日本美術」という概念が成立したかを学びます。参加者の方には、事前にテキストの指定箇所を読んでいただきます。その上で、講師がテキストの補足解説を行うと共に、参加者間の対話を通して内容の理解を深めます。

【第1回】 6月17日（水）

【第2回】 7月22日（水）

【第3回】 8月19日（水）

【第4回】 9月23日（水・祝）

【第5回】 10月21日（水）

*使用テキスト

佐藤道信『「日本美術」誕生—近代日本の「ことば」と戦略』（講談社選書メチエ1996年1,680円）

※書籍の入手が困難な方は当館が注文いたします。注文ご希望の方はその旨を申込ハガキにお書き添えください。（書籍代1,680円を徴収いたします。）

*定員／ 50名

*会場／ 当館1階セミナールーム

*参加費／ 無料（ただし、テキストをお持ちでない方は書籍が必要となります。）

申込方法

受講を希望される方は、往復ハガキまたは ホームページ・あいち簡易電子受付サービスから5月22日（必着）までにお申し込みください。電話による申し込みは受け付けませんのでご注意ください。

※各講座5回全て参加できる方のみご応募ください。 ※応募多数の場合は抽選を行いますので、あらかじめご了承ください。

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/event/01.html>

往復ハガキ

ハガキ1枚につき
1講座の申し込み。
一人一葉。

▼往信表面

50	44440002	岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
往信	「やさしいミュージアム講座」係	岡崎市美術博物館
		（空白） ※当館からの連絡用

▼返信裏面

▼返信表面

50	□□□□□□	希望講座名 「みんなで歩こう!新編岡崎市史 (史跡・遺跡編)」 または 「日本美術」はいつからあるの?」
返信	市・郡	●郵便番号
	区・町	●住所
	様	●氏名
		●年齢
		●電話番号
		「日本美術」はいつからある?講座のみ 書籍注文の有無

